東井義雄　「いのち」の教え

かつお

けさ、学校に来がけに　　母と言いあいをした。
ぼくは、どうにでもなれと、　　母をボロクソに言い負かしてやった。
母は困っていた。

そしたら、学校で、昼になって、　母の入れてくれた弁当のふたをあけたら、
ぼくの好きなかつおぶしが　　パラパラとふりかけてあった。
おいしそうに匂っていた。

それを見たら、　ぼくは、けさのことが思い出されて　　後悔した。
母は、いまごろ　さみしい心で昼ごはんを食べているだろうか　と思うと
すまない心が、　ぐいぐい　込みあげてきた。

今の子どもがお母さんを言い負かすくらい朝飯前のことです。輝雄君も、お母さんをやっつけて、得意になって登校したのでしょう。ところが、昼になって、お母さんか入れてくれた弁当の蓋をあけ、お母さんの心にであったのです。わが子に言い負かされて、何も言えなくなってしまったお母さんが、そういうわが子の大好きなかつおぶしを、ふりかけてやらずにおれない、仏さまのような母の心にであったとき、とめようと思ってもとめることのできない「すまないと思う心」が、込みあげてくるのです。　仏さまのお心を「大悲」といいますが、お母さんをやっつけて得意になるやんちゃ者も、「大悲」にであうと、思いやりの心をもたずにはおれなくなるのです。

東井義雄『「いのち」の教え』P22～P23

生い立ち

東井義雄は豊岡市但東町佐々木の浄土宗本願寺派「東光寺」の長男として、明治45年に京都で生を受けました。父は義澄、母は初枝といい、義雄３歳の時、豊岡市但東町へ帰ってきました。母は義雄が小学一年生になった５月に病死。新しい母が来てもなつけませんでした。生活も楽ではなく、そのために山も田畑も手放して貧乏生活を余儀なくされました。（原文通り：正しくは兵庫県）

食事は毎日「チョボイチご飯」でした。小さな鍋でお供えのご飯を炊くのですが、その時に出るとぎ汁に大根をみじん切りにしたのをどっさり入れ、パラパラと米を加えて炊くと大根ばかりの間にご飯がチョボットあるご飯もどきができます。これが「チョボイチご飯」です。

５年生になった時、父が親類の借金の保証人になっていたので、家財道具を差し押さえられ、食器棚まで封印されてしまいました。進学したかったのですが、この経済状態のため断念し、通信教育で中学校の勉強をしながら小学校を卒業後、奨学金をもらいながら姫路師範学校に入学しました。

（出典：但馬の百科事典）

村を育てる教育を実践した情熱の教育者

昭和７年豊岡小学校へ着任。その頃、昭和の大恐慌の余波が厳しく、欠食児童がいたる所で問題になっていました。義雄は「雑草のごとくに」という文集を作って、どんな環境からでも、どういう状態になっても立ち上がれる子どもを育てようとしました。そんな中、父義澄が亡くなりました。義雄28歳の時でした。終戦後、価値観が一変し、教育制度が大きく変わりました。反省と暗中模索の中、昭和32年(1957)に東井義雄の「村を育てる学力」というタイトルで出版された実践記録は全国的に大きな反響を呼びました。生活からかけ離れた学問などあり得ません。生活の中から課題を発見し、教師･地域と課題を共有し、問題を解決していく過程の中から育つ子どもの生きた学力が確立することを発見し、実践しました。そこから連帯が生まれ、共感が育ち、親を見捨てず、家を見捨てず、村をも見捨てない学力が育つのです。教師として村の教育に一生を捧げました。平成３年不慮の災難のために急逝され、時に79歳でした。

（出典：但馬の百科事典）

東井義雄は、幼少期に田畑までも手放さな貧けならない程の極貧生活を余儀なくされます。また母との死別も重なって、相当の苦労があったことでしょう。このことが、仏教への信仰と深く関わり、東井のいのち観とその後の生き方に大きな影響を与えたことは、想像に難くありません。また、経済状態のために進学を断念しながらも、通信教育で中学校を履修し奨学金で姫路師範学校に進学したたくましさは、まさに雑草のごとくです。教職に就いてからは，教え子から「生の神秘さ」や「生かされている自分」に気づいたり学んだりします。そして、父との死別や愛児の大病が，さらに東井の「いのち観」を深めていきました、

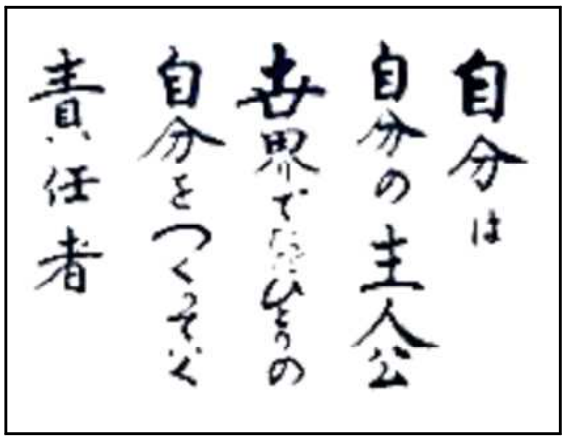
しかし、戦争は東井に責任を問い、苦しみながら生き方の模索を余儀なくされます。戦争協力者として批判され，敗戦後は転向教師と揶揄されながらも沈黙を守り通しました。人間の愚かさや生かされていることへの感謝を痛切に感じた時期でもありました。生き方をもう一度深く見つめなおす機会でしたが、「いのち」のはかなさや無念さを重く感じたことだと察します。現実の厳しさや失望感の中で，神も仏もあったものではないと無神論に走ります。しかし、それも相当なジレンマがあったようで、仏教から逃げながらも、その思いがかえって強くなっていったと回想しています。母親のお経を唱える慈愛の面影が、頭から決して離れることはなかったのです。

苦悩を重ねながら戦前教育の罪を反省し、教職期後半には生活に根差した教育実践、学力の確立を行い大きな反響を呼びました。臼田校長との出会いによって、さらに磨きがかかります。学校通信の発行，地域に根差した教育の推進，授業論，学力論、教育評価論，若手教師育成など様々な教育実践を展開していきました。

退職後は，大学で非常勤講師を務めたり、全国で講演活動を行いました。また、仏教と教育の関係に言及したり、家庭での心の安らぎ、母親の重要性、感謝の気持ちをテーマとした執筆活動、出版にも尽力しました。ここに東井の「いのちの教え」の集大成をみます。

東井義雄の著書

『母のいのち子のいのち』(1979),「家庭はみんなの心を育てる畑」(1980),「わたくしは私をつくる主人公」(1984),『喜びの種をまこう―誰でもできる無財の七施』(1990),『おかげさまのどまんなか』(1994)



「自分は自分の主人公　世界でたったひとりの　自分をくっていく責任者」…ここに東井の「いのち観」が集約されているように思えます。それは、自主自律を通して自分に責任を持ち、自分らしい生き方ができる人間のあり方を問うものでもあります。そうした集積が、今の日本や大人社会にまで波及しいていく原動力となり得ます,（わたくしは私をつくる主人公）

人として持つべき徳・価値の問題は、「おかげさまのどまんなか」で提起されています。また、子どもをどう育てるか，家庭や家族の役割とあり方を論じているのが、「家庭はみんなの心を育てる畑」です。子どもが育つ地盤は，家族のつながり，学校での教師とのつながりに基づくと論じています。こと重要なのが、生き方の原点となる母と子の関係です。（母のいのち子のいのち）

『喜びの種をまこう―誰でもできる無財の七施』(1990) の「無財の七施」は,『一切経：雑宝蔵経」にある教えです。しかし東井は，仏教者にあらずとも全ての人に「無財の七施」は宿れると説きます。人はややもすると、大きいことや目立つことばかりに気を取られ，小さい事柄や一寸した心配りを忘れがちです。お釈迦様の「無財の七施」の教えは，今の世相を見越して私たちのために記したものではないかと思ってしまうと東井は述べています。

☆百千の灯あらんも　　われを待つ　　灯はひとつ

☆生きてよし、死してよし、どことてもみ手のどまんなか。おかげさまのどまんなか。

☆土は、土に対しての感謝の念をおこさねばならぬことさへ忘れしめる程、平然と偉大です。

☆根のある草は、芽をふく、花ひらく。われわれにとって「根」とは何か。何が、「根」であるか。

☆根たくましければ、おのづから育つ。　　☆根の深さとひろがりが樹の高さと広がりになる。

☆下農は雑草を作り、中農は作物を作り、上農は土をつくる。

☆見えないところがほんものにならないと、見えるところもほんものにならない。

☆つまらなく見えるものの中からすばらしいものが生まれる。根気･根性･性根・それが人間を決定する。

☆見えないところで　見えないものが　見えるところをささえ　生かし　養い　あらしめている

☆自転車のタイヤを支える道ははば三センチもあれば足りるだろう。しかし実際には、三センチの道幅では通れない。直接役に立つところだけが有用であるのではない。何の役割りも果たしていないように見えるところが、案外大切なはたらきをしてくれているのである。私は田舎道を自転車で走るとき、いつもそう思う。

☆生きるということは、容易のことではない。ただ生かしてもらっているだけで、それは、大したことなのだ。

☆雨の日には　雨の日の　　老の日には　老の日の　　かけがえのない　　大切な人生がある

☆雨の日には　　雨の日にしか聞かせていただくことのできない　ことばを超えた　ご説法がある

　老いの日には　　老いの日にしか聞かせていただけない　　ご説法がある

　病む日には　　病む日の　　ご説法がある

☆「生」も「死」も全て「み手のまんなか」

☆悲しみをとおさないと　　見せていただけない　　世界がある

☆太陽は夜が明けるのを待って　昇るのではない　　太陽が昇るから　　夜が明けるのだ

☆ああ　きょうも　親子でおらせてもらった。

☆明日がある あさってがある と考えている間は なんにもありはしない　かんじんの「いま」がないんだから

☆拝まない者も　おがまれている　拝まないときも　拝まれている

☆すみません　南無阿弥陀仏。

☆川にそって岸がある　　私にそって本願がある　　川のための岸　　私のための本願

☆散るときが　浮かぶときなり　蓮の花 が　　しみじみとありがたい　　南無阿弥陀仏

☆助けてくだされよというにあらず　　助かってくれよとある仰せに従うばかりなり

☆この不思議ないのち　　それを　今　　生きさせてもらっている

☆「子どもは星」　どの子も　子どもは　星　　みんなそれぞれがそれぞれの光を放って輝いている

　パチパチ　まばたきしながら　　子どもは自分の光を見てもらいたがっている　　光を見てやろう

　まばたきにこたえてやろう　　光を見てもらえないと　　子どもはまばたきをやめる　光を消す

　光を消しそうにしている星はないか　　まばたきをやめそうにしている星はないか

　光を見てやろう　まばたきに　こたえてやろう　　そして　天いっぱいに　子どもの星を　かがやかせよう

参考資料：東井義雄の教育実践の思想的基盤についての考察　古家 佳美　（滋賀大学大学院教育学研究科論文集）

JR西日本あんしん財団 第5回連続講座「いのち」を考える 「それでも人生にイエスと言う」 山田邦男（大阪府立大）